資料 7「マルティンとイルゼの教訓話」 または、「香辛料入りの蜂蜜ケーキでできた家」

ドイツ・ノイルッピンの一枚絵　1835/40 年

„Lehrreiche Geschichte von Martin und Ilse, oder das Pfefferkuchenhäuschen“　Neuruppiner Bilderbogen

1. マルティンとイルゼ兄妹の両親は貧しく、子ども達は売るためのイチゴを森で探さなければならなかった。
2. ある日二人は森で迷子になり、夕方、蜂蜜入りケーキでできた氷砂糖の窓のある家にたどり着いた。
3. 二人は家に近づき、家をひとかけら、かいて食べた。すると声がした。
「ポリポリ　カリカリ　パンの耳、私の家をかじるのは誰だい」
4. びっくりして子供たちは逃げかけたが、皺だらけの老婆が家から出てきてこう言った。
「お入り、おいしいものがあるよ」
5. 子供たちは家に入り、クルミ、リンゴ、ミルク、米のかゆをもらい、疲れていたので寝床に入った。
6. ところが老婆は、子供を食べる性悪女だった。翌朝早く、マルティンを寝床から引きずりだし、鉄格子のついた家畜小屋に閉じこめてしまった。
7. それから老婆はイルゼを起こし、こう言った。
「起きるんだ、火を焚いておいしい食事の用意をおし。お前の兄ちゃんに食わすのさ、まるまる太るようにな、太ったら殺して食べてやる。」
8. マルティンは心労でどんどん痩せていった。 そこで老婆はまず、イルゼを食べることにした。
パン焼き窯を熱くすると、その中へ彼女を押し込もうとした。
9. イルゼは愚かなふりをして、老婆にどうやったらいいか見本を見せてと言った。老婆がパンシャベルに乗ったところを見はからい、イルゼが窯の中に押し込むと、老婆は死んでしまった。
10. イルゼは鍵を抱えて鉄格子の扉のところへ駆けつけ、大事な兄を救い出した。
兄妹は神様に、救い出されたことを感謝した。
11. 二人は小屋中を捜し回り、真珠や宝石といった宝物でいっぱいになっている部屋を見つけた。
宝物を持って兄妹は両親のもとへと帰った。
12. ああ、両親は子供たちと再会できてどんなに喜んだことか。きれいな家を買って、毎日ごちそうを食べることができる大金を手に入れたのだった。